



C2021-12 神は本当に愛しているか

[今月の聖書]

ヨハネ 3:16

神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

ヨハネ 1:9.10.14

1:9 すべての人を照すまことの光があつて、世にきた。 1:10 彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。 1:14 そして言はるは肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であつて、めぐみとまことに満ちていた。

エペソ 2:10

わたしたちは神の作品であつて、良い行いをするように、キリスト・イエスにあつて造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。

ローマ 6:23

罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである。

第二コリント 5:21

神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあつて神の義となるためなのである。

第一ヨハネ 4:9.10

4:9 神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。 4:10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さつて、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。

メリークリスマス！今年のクリスマスに「神は本当に愛しているか」という大きな問いかけをしたいと思います。それは、世界中にあまりにも多くの問題があり、さらにコロナウィルスという地球規模の感染症によって人類がこのように苦しんでいるからです。そして最も優秀な頭脳を持っていると思われる人々が殺人兵器を開発しています。現実の平和には程遠い世の中を見る時、神は本当に愛しているのかと叫ばざるをえません。

この質問に最も的確に答えることができるのは「聖書」ですね。聖書には、神は創造主であり、聖なるお方であるとともにさばき主ですが、その御性質は「愛」であると記されています。

①人類はユニークな神の作品として作られました。しかしアダムの罪が入ってから、争い、苦しみ、憎みあい、ついに死ぬものとなったのです。

②神は滅びゆく人類をご覧になって、私たちの罪と反逆にもかかわらず、愛を示されました。そして神は「人となって共に住む」決意をされ、神であつて人であるイエス・キリストを地上におくられたのです。それがクリスマスです。私たちが神を知りたいと思う時、イエス・キリストをじっと見つめることによって知ることができます。

③神の愛はキリストの十字架の内に表されました。あなたの罪のために死んでくださったことによって愛が証明されたのです。この愛は、罪を赦すばかりではなく永遠の命を与える神の愛なのです。そして神の愛は世界を変えます。

④現代社会も、私たち一人一人も呻めき苦しんではいませんが、この愛の神の御守りと、究極的救いの計画の中に生かされていることに気づき、身を委ねるところに救いがあります。「言葉は肉体となった」(to become, change)ことは、あなたも変わる事なのです。クリスマスとは人が生まれ変わるというメッセージなのです。

今年のクリスマス、あなたの上に祝福が豊かにありますようにお祈りしています。

(お知らせ)

*今年もクリスマスの特別行事を開催することが出来ませんでしたので、「DVD クリスマススペシャルバージョン Peace and Joy」を制作いたしました。(3000円)青山でのクリスマスの賛美とメサイアコンサートを編集した貴重な記録です。

*2022年自由が丘チャペル元日礼拝はいたしません。1月2日(日)新年礼拝として合流いたします。

「永遠のいのち」を持つ

鵜戸西 努 師（宮崎県）

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それはみ子を信じる者が一人として滅びることなく、永遠の命を持つためである。」（ヨハネ福音書 3：16）

永遠のいのち。これ以上に深く広く価値のあるものが他にあるでしょうか。

永遠のいのち。それは、無条件で与えられ、無限のいのち、終わりのないいのち。

永遠のいのち。それは私の生涯の罪の赦し、日々いきいきと生きるエネルギーであり、私がこの地上での夜が訪れ瞼が閉じた後に、天のみ国で瞼を開き朝を迎えることです。

【無条件の赦し】私 鵜戸西 努は争いの絶えない家庭で生まれ育ち、子ども時代は万引き、放火、飼っていた生きものを餓死させたり人知れず問題行動のある子どもでした。そして復讐心と希死念慮に取り憑かれた思春期を迎えました。16歳の時に近所の教会を訪ね、ただ単純にイエスを救い主として心に迎えました。主が私の罪を負い十字架にかけられ、赦しのために血を流されたと信じました。生涯に犯した罪、犯すであろう罪が赦された喜びに満たされました。それ以来45年。福音の伝道者として歩いて参りました。人生には色々ありましたが、心に灯った燈は消えることはありません。ただ、信じる者に永遠のいのちがあるのです。



【無限のいのち】伝道者ととある高齢の女性。「私は90を過ぎ、夫は亡くなり、健康は損なわれ、広い家と施設を行き来しながら生活しています。月に一度親孝行な娘と地元の一流ホテルに宿泊するも楽しさを感じません。美味しいものをいくら食べても、砂を噛むようで味を感じません。なんの生きがいもありません。こんなことならば、はやく死んだほうがましです。」と伝道者に言いました。伝道者は「心の中にイエスを迎えると永遠の命が与えられ、生きる力が湧いてきますよ」と応え一緒に祈りました。キリスト教について、ほとんど知識の無いこの女性が祈りおわると、さながら貧血の人に血が通うように、いのちが入っていくのを眼の当たりにしました。その後、この女性はご自身の娘さんと貧困者や豪雨などで被災した方々の支援活動に参加されているそうです。ただ、信じる者に永遠のいのちがあるのです。

【終わりのないいのち】ある緩和ケア病等に、末期の癌を告知された50代の女性がおりました。病棟のカウンセラーが呼ばれ、話を聴きました。その女性は自分に死が迫ってきている事、それが恐怖であると告げました。そのカウンセラーはクリスチャンでもあり、伝道者でもありました。天国の希望の詩「Over the sunset mountain」を歌いました。女性は「私もこのような心で死を迎えたいです。」と言い、その時にイエスを主として、救い主として心に迎えました。数日後、伝道者は再度呼ばれました。病棟に着くと主治医が「今日亡くなる可能性が大きいです。〇〇さんがお待ちですよ」と。病室に入ると、女性は「先日の歌をもう一度聞かせてください」と言われ、伝道者は歌い、一緒にお祈りしました。病床に横たえている女性の頬に喜びの涙の一筋が。その30分後、天国に帰って行かれました。ただ、信じる者に永遠のいのちがあるのです。

今日、ダビデの町にあなた方の為に救い主がお生まれになった。この方こそ、主なるキリストである。
(ルカによる福音書 2：11)